

サインと 景観

第7回

高橋芳文

広告景観研究所 所長
興和サイン株式会社 代表取締役
特定非営利活動法人 ストリートデザイン研究機構 理事長

建築とサインは 「調和」ではなく「共存」すべき

今回の当コーナーにご登場いただいたのは、元早稲田大学文学部非常勤講師及び客員教授で、「SIGNS in Japan」（発行：日本屋外広告業団体連合会）の元編集長である鎌田経世氏。現在の鎌田氏は第一線から退いているが、今後のサインと景観の在り方を考えるためにもご意見をお聞きしようと考え、この対談が実現した。（構成：編集部）

江戸時代から サインは調和ではなく共存

高橋 ボクは鎌田先生が編集長を務めていた「SIGNS in Japan」のバックナンバーを持っています。今読んでも内容は決して古くないし、むしろ時間が経つほど価値が出てくるように感じられます。当時はどのような方針で雑誌を作っていたのですか？

鎌田 私が編集長になったのは、30号くらいからです（※）。それ以前にも原

稿を執筆していて、いろいろと意見を言っていたからうるさかったのではないのでしょうか（笑）。「SIGNS in Japan」は日広連の機関誌としての側面も強いのですが、私はサインを中心に都市問題や景観問題などにも言及していきました。また、SDA（日本サインデザイン協会）の関係者で一家言持っている方々に原稿を依頼していました。

高橋 鎌田先生が考える、都市環境の中におけるサインの理想的なカタチは、どのようなものですか？

鎌田 東京が焼け野原から目覚ましく復興していった1960年代に、おかしな建築や看板が増えました。すると建築には何も言わないのに、看板については「汚い」とか「看板公害だ」という声があがり、「サインは建築と調和しなければいけない」という話になってきたのです。

最初は私もその意見に同調しました

が、ちょっと違うんじゃないかと思うようになりました。

なぜかという、調和とは看板をできるだけ目立たなくする、という考えだったのです。これだと看板の意味や可能性も阻害してしまいます。広辞苑で調べると、調和とは“うまくつりあい全体が整っていること”。矛盾または衝突なく互いに和合すること、共存とは“同時にふたつ以上のものが存在すること”となっています。

よく「江戸時代の看板は建物に調和していた」という意見を聞きますが、当時の絵を見ると決して調和だけを考えていたわけではありません。建築と看板は「共存」するべきです。

岡山県真庭市勝山が 一番記憶に残る取材だった

高橋 鎌田先生は日本中を取材で回っています。サインと景観が共存している、理想的な街があれば教えてください。

鎌田 岡山県真庭市の勝山は、一番記憶に残る取材になりました。城下町の面影を残す数百メートルの「街並み保存地区」では、約100軒のお店やお住いが暖簾を掲げています。すべて加納容子さんというデザイナーが作ったものです。1軒が平均4枚の暖簾を持っていて、季節毎に掛け変えているところも多いのです。

私は2008年と2011年に勝山を取材しているのですが、2011年に行ったときは、2008年よりもさらに良くなっていました。お店だけでなく、駅とか、以前大工をやっていて、今はやっていない人の住いなどにも暖簾が掲げられていたのです。なお勝山は「平成20年度 SDA 特別賞」と平成21年度には「美しいまちなみ大賞」を受賞しています。

高橋 他にはありますか？

鎌田 川越や銀座もいいと思います。どちらも歴史があって、しっかりしています。大阪の心齋橋もずいぶん良くなりました。心齋橋は地域のリーダーが、お店の前の道路にまで看板を出さないようにしようとか、おかしな場所に看板を付けるのをやめようと徹底していて、それでだいぶ良くなったのです。

市民がサインに対して 意見を言うことも重要

高橋 時代とともに「描く看板」から「ネオン」、そして「インクジェットプリンター」へと技術革新が進んでいきました。それは良い面と悪い面があったと思います。この技術革新についてはどう思われますか？

鎌田 技術革新によって、文字は確実に良くなりました。データがあれば拡大したり変形させたりできます。でもそれは平面だけです。サインの魅力は立体的なところにもあるので、プリンターでは表現しきれません。

負の面は、職人が食えない時代になって、職人の数がどんどん減ってしまっていることです。これはしかたがないことかなと思います。

高橋 ボク個人としては、看板の職人文化を継承していかなければいけないと思っています。それがなくなったら、日本の都市景観はつまらなくなってしまいませんか？

鎌田 私も高橋さんの意見には賛成だけど、現実には難しいかもしれません。

例えば東京の大田区の町工場などには、日本独自のものづくり職人がいるけど、その人達もギリギリの生活だったりします。

正直言って私には解決策が思い浮かびません。それに第一線からは退いた

身だから、こういったことは高橋さんのように若い方たちに頑張っていただければと思います。

高橋 はい、頑張ります。職人文化の継承というのは、ボク自身の活動テーマのひとつでもありますから。

それともうひとつ質問です。全国展開するチェーン店などの看板でも、これからは地域固有のカラーを出していくべきだといった考え方が少しずつ広がっています。これについてはどう思いますか？

鎌田 実際にそうなればいいけど、お客さんである一般の方々のサインに対する意識はそこまで高くないでしょう。でも、看板が綺麗になっていると「いい看板だね」と思う人もいるはずですよ。多くの人がそう思ってくれるように仕向けることができれば可能性はあります。

昔からサインに対する市民の動きなどがあって、例えば、4面のネオン塔のうちの住宅街に向いている1面は消すようにと陳情した地域がありました。そういった市民の意見というのも重要ですよ。

また、川越や佐原が「小江戸」と呼ばれるように、何かブランドがあればや

りやすいかもしれません。本当はSDAのような団体に頑張ってほしいところですよ。でもSDAは建物の中には関心が高いけど、外にはあまり関心を示さないのです。

高橋 ボクが理事長を務めるストリートデザイン研究機構は、そういったことにも取り組んでいます。でもサインのデザインや景観というのは、人の命や安全に関わることではないので、行政の中でも優先順位が高くないのです。行政の担当者も人数が少なかったり、他の業務と兼務していたりして、割ける時間もほとんどありません。まずはそこから変えていかなければいけないと思っています。

鎌田 これからのサインや景観については、若い方々にお任せします。私はもう、サインとはきっぱり別れようと思って、サイン関係の本もほとんど捨てました。今は俳句に夢中です（笑）。そうは言ってもカメラを持って歩くときは、いいサインを見つけるとつい撮影してしましますが（笑）。

(※)「SIGNS in Japan」は1977年に創刊され、2012年に142号をもって休刊。2013年には地域の魅力をつくるサインデザイン専門誌“signs”として復刊した。



【取材協力】
鎌田経世氏
元早稲田大学文学部非常勤講師及び客員教授
「SIGNS in Japan」元編集長



広告景観研究所の高橋芳文所長。